

『美しい村』論

―〈半身〉の軌跡を追う―

蜂 谷 百 奈

はじめに

堀辰雄『美しい村』は、若い小説家である「私」が、「悲しい別離」をした少女への想いを引きずったまま「k:村」に滞在し、自然や新しい少女との出会いを「遁走曲」の流れに併せて描き出した小説である。

「山からの手紙」〔大阪朝日新聞〕朝刊 一九三三年六月二十五日、「美しい村」〔改造〕一九三三年一〇月、「夏」〔文藝春秋〕一九三三年一〇月、「暗い道」〔週刊朝日〕一九三四年三月の四編が初めて単行本（『美しい村』野田書房 一九三四年四月）に収録されるにあたり、総タイトル「美しい村」のもと「山からの手紙」が「序曲」と改題され、全編に渡る大幅な加筆訂正の上、「ファウスト」第二部よりエピソードの挿入、「三好達治に」の献辞・「ノオト」〔出版社への手紙〕、「I丸岡明に」,「II葛巻義敏に」,「III夏のノオト」,「IV（タイトルなし）」の四節が附せられた。「ノオト」は野田書房版のみに附され、以降のテキスト『美しい村』には収録されていないが、文字通り作品に寄り添う「ノオト」として、四章とは別次元でありますがも小説を構成する上で補助的な役割を担うものと言える¹⁾。ゆえに、本稿では「ノオト」等を含む野田書房版『美しい村』に基づいて論じる。

『美しい村』を考察するにあたり、「私」の〈半身〉を軸に見ていく。〈半身〉は小説には登場する表現ではなく、三塚貴氏の論より確認できる表現²⁾である。三塚氏によれば〈暗い半身〉は「この土地ではじめて知り合ひになった或る女友達との最近の悲しい別離」につながるもの、「明るい半身」は「田舎暮らし」と、そんなある日突然知り合った「少女」につながるもの³⁾とされている。本稿でも、〈半身〉という表現を利用することは「私」の精神・内面に起こる変化を捉える上で最も適切な方法と考え、「私」の精神の内暗黒的な鬱々とした部分の〈暗い半身〉、前向きな積極思考な部分の〈明るい半身〉の二つで成りたつと言える。〈半身〉の展開と軌跡はまるで「遁走曲」をなぞっているようである。「夏」の章にてバツハ「ト長調の遁走曲」が聞こえてくる場面があること、「美しい村」の章にて副題として「或いは小遁走曲」とあること、また「ノオト」にも「遁走曲形式」に関し、「主題と応答とが、代わる代わる現はれては消えてゐるうちに少しずつ曲が展開していく」と記述があるように、「遁走曲形式」は着目すべき点である。そもそも「遁走曲」とは「ひとつの主題（ときには二つあるいは三つの主題）が、各声部あるいは各楽器に定期的な規律的な模倣反復を行いつつ、特定な調的法則を守って成る楽曲」³⁾である。

加えて、〈半身〉が「遁走曲形式」に展開することには、「私」の環境―訪れている「k：村」の事象が動力となっている。中でも、小説内において圧倒的な登場回数を誇る野薔薇を「私」の〈半身〉の変化を促している一因であると見なし、関わりを鑑みながら〈半身〉の「遁走曲形式」における変遷を考察していきたい。⁽⁵⁾

その際、全体の主題は岩崎俊郎氏や野沢京子氏と同じく「変化」と捉え、前半の二章「序曲」「美しい村」における主題は「或る女友達との悲しい別離」と野薔薇を代表する自然、後半の二章「夏」「暗い道」は新たな少女との出会いと、その二人が「k：村」という空間内に存在できる時の終わりとして考察を進める。先行研究では、全体として「変化」を伴う「愛」とする中沢弥氏⁽⁸⁾、全体は「変化」であるとした上で前半部を牧歌的、後半部をロマネスクとした本橋健治氏⁽⁹⁾、前半部を田舎暮らし、後半部を新しい幸福とした大森郁之助氏⁽¹⁰⁾の論等が挙げられる。本稿でも小説を二段階に分けて考える。「美しい村」以前と「夏」以降では、それぞれの内に細かい「変化」も見られるが、「変化」を大きな群で見ると〈暗い半身〉に傾きがちであった傾向が〈明るい半身〉へ移動しているため、一つの大きな区切れと捉え以下の考察を進めたい。

野薔薇と記憶

―「序曲」「美しい村」―

「序曲」の章冒頭より「私」は「この土地ではじめて知り合いになった或る女友達との悲しい別離」を起因とする〈暗い半身〉を伴って綴られている。この精神的負傷を癒そうと再び「k：村」を訪れている。更に、三年前に病気をした時も滞在していたことが「序曲」より伺え、物事を快復させるための場として「k：村」が機能していることが分かる。⁽⁷⁾

の「k：村」の空間を契機として始まる〈半身〉の変遷を追いたい。

「美しい村」の章で「今更のように蘇ってくる」「或る女友達との最近の悲しい別離」「そんな物思いに耽りながら」とあるように、別離した少女へ対する慕る想いは今でも頭をよぎり、胸に留まったままである。

どこへ行つても野薔薇がまだ小さな硬い白い蕾をつけてあます。そのの咲くのが待ち遠しくなりません。（「序曲」）

いかにも野生の花らしい花を、これから僕ひとりきりで思ふ存分に愛玩しようといふ氣持ちは（中略）何ともいへずに爽やかで幸福です。（「序曲」）

「爽やかで幸福」と感じ、野薔薇が咲くのが「待ち遠しくてな」らないように、「k：村」の非日常的空間・自然に対するこれからの展開に対する期待が伺える。「美しい村」の章でも、当初は野薔薇と戯れている様子や「私のありつたけの誠實を示すことのできる機曾の来つつあることを心から喜んで」いるように、野薔薇との出会いの喜びが体現化されており、その環境が順調に「私」を〈明るい半身〉へと昇華する役割を果たしている。しかし「私」は、野薔薇の姿を視覚で認めるよりも先に香りを先に吸収してしまう。

それに氣が付いた時は、既に私は彼等の發散してゐる、そして雨上がりの濕った空氣のために一ところに漂ひながら散らばらないでゐる異常な香りの中に包まれてしまつてゐた。私は彼等の白い小さな花を見るよりも先に、彼等の發散する香りの方を最初に知つてしま

つたのだ。「美しい村」

この場面を皮切りに、「明るい半身」へ向かっていた精神の行方は、一転して「暗い半身」へと向きだす。野薔薇を愛でているうち、「自分の視線のなかに自分自身を集中させ」始めてから「私の視線を自分自身の内側に向け出」「気まぐれな私を責め訴えるかのように」香りは強さを増し、結果「それ等の少女たちの形づくった生垣はちょうどお前たちにそっくりだった」という言葉に代表されるように、問題解決のために目を逸らしてきた少女の記憶が蘇る。この場面は「暗い半身」と「明るい半身」が交互に現れる「遁走曲形式」の一端がとても鮮明に現れている場面といえる。「美しい村」の章において野薔薇は「ほとんど全部蝕まれて、それに黄褐色のきたならしい斑点がどっさり出来てしま」い、花を失うと同時に前半部における「明るい半身」への誘導役の役割を失う。

一瞬の輝き

―「夏」「暗い道」―

野薔薇は、後半部「夏」「暗い道」では反対に「暗い半身」への誘導役となっている。「きらきらと光った」少女が「明るい半身」への新たな誘導役として颯爽と登場することとは裏腹に、野薔薇は悲しい別れをした女友達の記憶を「まざまざと私のうちに蘇らせ」てしまい、野薔薇だけでは「暗い半身」を討伐するには太刀打ち出来ないことが決定的になる。その後、野薔薇の棘が「私」のジャケットに穴を開けてしまう一件で「暗い半身」へ後戻りする予兆が垣間見えたが、「私」は新しい少女にその穴を笑いながら見せ、野薔薇の棘から受けた攻撃を共有する

ことによって暗い予兆を乗り越え、「明るい半身」へ一気に向かっていく。同時に、順調に見えた新しい少女と共に過ごす空間も、時を経るに連れ、別れと去らねばならない時が静かに近づいていた。登り詰めた「明るい半身」の極みをいとも簡単に根底から破壊させる別れは、避け得ることの出来ない事態である。「k:村」は「私」が過ごしてきた地元の人間しかなかった季節から、別荘地・観光地として賑わいを見せる季節を迎え、「私」の「半身」を動かす舞台「k:村」の実情は変容する。次の季節には帰らねばならない「私」に二人で過ごすことのできる時間は、長くは残されていない。その現実から逃げるかの如く、「そんな人目につき易い場所で私が彼女と親しうにしているのを、私の顔見知りの人々に見られたくなかった」と、空間内の時間軸から独立した時を過ごそうと試みる。しかし「暗い道」で二人が許された時間を超えてもお「k:村」という非日常的空間に居残ろうとしたが為、最も遭遇したくなかった友人達と鉢合わせしてしまう。

いつまでもそつぽをむいて皆の降りてくるのを待つてゐると、突然、そのうちの誰かが足を滑らして、「あつ！」と小さく叫んで、坂の中途にどさりと倒れたらしい氣配がした。見上げると、その坂の中途にまだ転がっているらしいものがまるで花ざかりの灌木のやうに見えた。（中略）私はただばかんとして眺めながら、その場を一步も動かうとしないで突つ立つてゐた。（「暗い道」）

友人達のうちの誰かが転倒することで、友人達か「私」のどちらかだけしかこの空間には存在できないことが示される。「私」が転んだのではないから無事であった」というのではなく、「一方しか存在できない」

という意を含んだ転倒と言える。同時に、いよいよ〈明るい半身〉をもたらしにくれた新しい少女とも別れ、再び〈暗い半身〉へ堕ちていく「私」が暗示されている。「ノオト」が「私がお前を愛して居たからって、それはお前に何の関係があるんだ」というゲーテ『詩と眞實』の一節で締められていることを参考に見ても、〈暗い半身〉へと堕ちるのである状況であり、「どうしたらこんな都会の真ん中に一人でいられるか」とも綴られているように、苦悩は続いていることが察せられる¹³⁾。

「遁走曲形式」と「k:村」という装置

「遁走曲形式」に繰り返し変化する〈明るい半身〉と〈暗い半身〉は、どちらか一方のみが現れ、一方は消えるという変動ではない。その前に存在した半身の上に積み重ねられ、上書きされていくのである。クレヨンで彩色された紙の上に水彩絵の具を塗ると、一見綺麗に塗れたように見えても水彩が弾かれてしまうようなもので、〈明るい半身〉はその水彩絵の具の如く非常に脆いものである。対して〈暗い半身〉は「私」の中でクレヨン彩色の如く圧倒的な密度で根づいている。〈暗い半身〉の原因を構成しているものは、どの章においても全て「k:村」という舞台に纏わる。にもかかわらず、今回の訪問のみならず「三年前（中略）病氣をして十月頃までずっと一人で滞在していた」とあるように、「私」は療養地としての機能及び避暑地の機能を求めている。

「暗い道」は〈暗い半身〉で終り、また〈明るい半身〉を得ようとするところで閉じられるが、この結末は何を意味するのであるか。「ノオト」を参照すると、その後「私」は「九月にはひつてから、私はやつとその村から帰ってきた」とあり、「k:村」から都会暮らしに戻ったことが分かる。また、「どうしたらこんな都會の真ん中に一人でゐられ

るか」との語りから、新しい少女とも別れを経験したことが伺える。そもそも「少女との別離」が、「私」が「k:村」を訪れる最大のきっかけとなっていたことを思い起こすと、再び小説の冒頭と同じような条件下に置かれていると言える。〈暗い半身〉へとさらに傾いてしまう原因も根付く地において「私」を縛る思い出や因果からの解放を求める為、無意識裡に「k:村」に捉われ、結果、解決することなく連鎖を繰り返しているのである。

ただし、円環的に同じルートを徒に繰り返しているのではなく、その連鎖を繰り返す中で、今回「悲しい別離をした少女」の記憶から「新しい少女」への出会いへと途中進展を見せたように、「完全な無為」の記憶・現状からの解放という完全な〈明るい半身〉へと少しずつ近づいて行くのだ。

〈明るい半身〉を目的に行つた避暑地「k:村」は、普段「私」が過ごす都会生活とはかけ離れた異国のような非日常的世界であり、隔て囲まれた閉鎖的空間である。そこには〈半身〉に変化をもたらすあらゆる装置（野薔薇を代表とする自然植物の存在・新しい少女との出会いの場など）があり、「私」の〈暗い半身〉と〈明るい半身〉が交互に現れ、「遁走曲形式」のように変化をもたらした。小説冒頭の別離から「k:村」を訪れるまで、「k:村」という閉鎖空間以外は「私」の〈半身〉に何らかの変化をもたらす機能を持ち合わせていない。「暗い道」の章全体で手紙を綴っているように、「私」にとって、ただ書き物をするのが〈暗い半身〉へと沈んだ状況に抗いもがき、耐える為の唯一の手立てであった。問題解決の為に己の意志で「k:村」を訪れ、療養を試みているような一連の行動では、〈明るい半身〉を求める上で随伴して起こる出来事が「遁走曲形式」をなぞらえたかたちで展開され、且つ「k:村」と

いう舞台装置が（半身）に働きかけをする欠かせない要素として深く関わりあっていたと言えよう。

注

- (1) 先行研究においては、この「ノオト」を中心に小説を考察した中島昭「堀辰雄『美しい村』（ノオト）考」（『国文学 解釈と鑑賞』一九八三年九月）や、『美しい村』四章と「ノオト」群を同格に置き述べた中沢弥「天使の空間——堀辰雄『美しい村』試みとしての純粹小説」（『文芸と批評』一九八九年四月）もありその扱いは様々である。
- (2) 三塚貴「堀辰雄『美しい村』の構成」（『日本文芸論稿』一九七五年三月）より確認される。
- (3) 『新訂標準音楽辞典』音楽之友社 二〇〇八年三月
- (4) 渡部麻実「『美しい村』生成——ゲーテの『詩と眞實』、あるいはスピノザの無私との邂逅」（『堀辰雄とモダニズム』二〇〇四年二月）では、「美しい村」の〈野薔薇〉の描写は「実に十二場面に存在」していると指摘している。
- (5) 野薔薇の描写に関して、先行研究において、渡部麻実「『美しい村』生成——ゲーテの『詩と眞實』、あるいはスピノザの無私との邂逅」（『前掲書』）ではゲーテ『若きウェルテルの悩み』の「野薔薇」と比較している。また、大久保喬樹「自然意識のモダニズム——近代性から現代性へ」（『日本近代文学』一九九七年一〇月）ではブルースト「失われた時を求めて」第一巻「スワン家のほうへ」第一部「マンゼ」・第二巻「花咲く乙女たち」との比較が行われているように、他の小説との関連性について言及しているものも多く挙げられる。今回の考察においては紙幅の関係から、他の小説からの影響関係には立ち入らないこととした。この点に関しては今後の課題とした。
- (6) 岩崎俊郎「『美しい村』論——堀文学における「作風の転調」をめぐる——」（『山口国文』一九八二年三月）、野沢京子「幻想（イマージュ）の生成——堀

辰雄『美しい村』を読む」（『立教大学日本文学60』一九八八年七月）
(7) 小説の舞台について、「k:村」は初出では「軽井沢」とされていたが、野田書房版以降のテキストでは「k:村」とされている。この「k:村」は、「山鷲だの、閑古鳥だのが元氣よく囀る」「樅や落葉松の林、その林の向こうに見えるアルプスの山々など」を背景に持ち、外国人別荘が数多くある自然溢れる架空の避暑地と言える。

(8) 中沢弥「天使の空間——堀辰雄『美しい村』試みとしての純粹小説」（『文芸と批評』一九八九年四月）

(9) 本橋健治「堀辰雄『美しい村』の時空」（『湘南文学』一九九二年三月）

(10) 大森郁之助「『美しい村』——主題と主人公の設定について」（『国文学』一九七七年七月）

(11) 「今しがたその人のしてゐたような難しい姿勢を真似ながら、その上に身を踞めてみた。さうすればその人の心の状態までが見透かされてもするかのように。その小さな茂みはまだ固い小さな荅を「はいにつけながら、何か私に訴へでもしたいやうな眼つきで私を見上げた。私は知らず識らずの裡にこれらの荅を根氣よく数へたり、そつと持ち上げてみたりしてゐる自分自身に氣がついた。」（『美しい村』）

(12) 「私はそれらの白い小さな花を私の詩のためにさんざん使つて置きながら、今日までその本物をろくすつば見もしなかつたけれど、今度こそ、私もそれらの花に對して私のありつたけの誠實を示すことのできる機會の來つつあることを心から喜んでゐた。」（『美しい村』）

(13) 「さうして私はその村に惜しげもなく残してきた、三四枚のレコオド（中略）と一緒に、孔のあいたジャケツと、運動帽と、運動靴とを。まるで私の抜け殻のやうに。」「どうしたらこんな都會の眞ん中に一人でゐられるかと、私はその方法を捜し出した。」（『夏のノオト』）

附記

本文引用は、『美しい村』（野田書房 一九三四年四月）に拠った。

参考文献

- 三塚貴「堀辰雄『美しい村』の構成」（『日本文芸論稿』一九七五年三月）
- 大森郁之助「『美しい村』―主題と主人公の設定について」（『国文学』一九七七年七月）
- 池内輝雄「本文および作品鑑賞 美しい村」（『鑑賞日本現代文学第十八巻堀辰雄』一九八一年十一月）
- 岩崎俊郎「『美しい村』論―堀文学における「作風の転調」をめぐる―」（『山口国文』一九八二年三月）
- 中島昭「堀辰雄『美しい村』（『オト』考）」（『国文学 解釈と鑑賞』一九八三年九月）
- 野沢京子「幻想（イメージ）の生成―堀辰雄『美しい村』を読む―」（『立教大学日本文学』60）一九八八年七月）
- 中沢弥「天使の空間―堀辰雄『美しい村』試みとしての純粹小説」（『文芸と批評』一九八九年四月）
- 本橋健治「堀辰雄『美しい村』の時空」（『湘南文学』一九九二年三月）
- 渡部麻実「『美しい村』のメチエ―隠し置かれた『装置』―」（『国文目白』37）一九九八年二月）
- 渡部麻実「『美しい村』生成―ゲーテの『詩と眞實』、あるいはスピノザ的無私との邂逅」（『国文学解釈と鑑賞別冊 堀辰雄とモダニズム』二〇〇四年二月）
- 『堀辰雄全集第一巻』（筑摩書房一九七七年十一月）
- 『新訂標準音楽辞典』（音楽之友社二〇〇八年三月）